戸隠神社
あをがき
青垣
平成29年［増刊夏号］
戸隱神社発行
〒381-4101
長野県長野市戸隱3506
026-254-2001
http://togakushi-jinja.jp

戸隠神社 御神籤ものがたり（その二）

神職が祝詞をあげて、おみくじの筒を振る――

戸隠神社のおみくじは独特な方法で参拝者に手渡される。（図①）

授与所の受付でおみくじを希望すると、まずは数え年を尋ねられる。それを受けて、おもむろに神職が祝詞を唱える。その中で、希望者の年齢と、男女の別を戸隠の神様に告げて、おみくじの筒を振りながら、教え導きを仰ぐ、言わば祈祷御籤である。そして筒から出た番号のおみくじを手渡されるのだ。自ら筒などを使って、出した番号を巫女さんに告げておみくじを受ける、よく見る光景とは趣が異なる。ご朱印ブームの昨今、朱印帳を携えた老若男女で賑わう社頭は、休日ともなればおみくじの筒を振る音のたえることがないほどだ。

図①戸隠神社のおみくじ

心静かに、おみくじを開ければ、神々の物語にちなんだ和歌、信心すべき神様、運勢や方位、そして待ち人・旅立ち・家造り・引越し・縁談・商い・訴訟など日常生活への助言、そして吉凶が記されていて、向こう一年間、生活の指標に用いるとされる。信心すべき神様は日ごろ目にする御祭神名と異なる表記になっている場合もあるので、不明の場合は受付に問い合わせるとよい。

こうしたおみくじはいつ頃、どのようにできたのであろうか。今号では、その歴史をたどってみよう。

おみくじの起源は、平安時代、仏の教えと真理を求め、唐に渡った円仁、円珍など天台宗の僧侶たちがもたらしたものとされている。その円仁、難破を重ねて上陸こそできたが、長期留学が許されず、不法滞在。苦難に満ちた求法の旅は十年近くに及んだ。最後は仏教弾圧という最大の苦難も生き抜き、曼荼羅や経典など国の宝、多数を持ち帰っている。命をかけた先人たちの尊い行いによって、今おみくじを手にすることができるのである。

特に円仁がもたらしたものを、良源（慈恵大師）が観音菩薩に祈念して、一番から百番まで整えたとされる。悪魔降伏など験力の持ち主であった良源は如意輪観音の生まれ変わりであると信じられ、このおみくじは観音籤と名付けられた。主に天台宗の寺院で引かれてきた。

良源は十世紀に活躍した高僧。第十八代天台座主で、天台宗中興の祖とされ、正月三日に亡くなったので元三大師と呼ばれる。降魔大師、角大師とも。（図②）

図②角大師のお影（おすがた）
埼玉県川越市 喜多院 提供

おみくじは占いの一種である。日本でも占いは古来より行われてきた。神代の昔、伊弉諾・伊弉冉の神様が、この国に降りられる際に「よき日よき時よき方法を占い定め、下の土地に天降らせられた」また、天照大神が天の岩戸を閉ざしてお隠れになった際、天兒屋命・布刀玉命が牡鹿の肩甲骨を用いる太占をしてご神意を伺ったとされる。神々の世界から、鎌倉、室町時代まで、天皇のご即位、将軍、公家方の武官、というトップ人事まで占われた記録が残されている。こうしたトップ人事を決する際、くじが用いられるのは無論異例であるが、決定のくじを含む何本かを用意し、御神前で引いたようである。神様の絶対的な託宣であって、将来の運勢を占う、いわゆるおみくじとは別であった。

重大な決断を前に、おみくじで占いたくなるのは人の常である。その時、何度まで引き直してよいのだろうか。現存する最古の御籤箱は、岩手県二戸市の天台寺のもので、室町時代とされる。そこには「吉凶を占うのは二度だけ」という旨が記されているという。つまりおみくじを引く時には一度だけ引き直してよい、ということであろう。ところが歴史を動かした大事件に臨んで、くじを二度引きなおしたやも知れぬのが、【本能寺の変】を前にした明智光秀である。『信長公記』（織田信長の一代記）に、愛宕山（京都）「太郎坊の御前にて二度三度まで鬮を取りたる由」とある。今となっては、光秀の心の内と鬮の中身を知るすべもないが、一度で思いとどまっていたら…と、歴史通ならずとも想像を巡らせたくなる。

本能寺の変から豊臣の時代を経て、江戸の太平の世が訪れると、徳川家康の側近、天海（慈眼大師）の登場によりおみくじは一気に民衆に浸透していく。それは天海がみた夢のお告げから始まる。

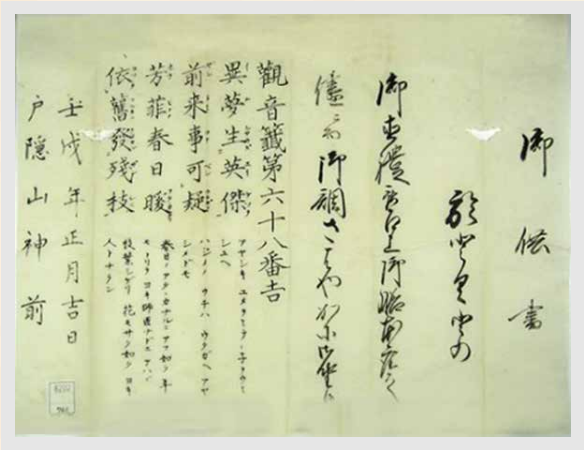
『慈恵慈眼両大師伝記』によれば、天

※あをがき（青垣）とは切り立った険しい山が垣根のように連なる様子。当社では祝詞の中で「青垣成す戸隠山の麓に鎮まり坐す戸隠神社」と用います。

海は常々元三大師に深く帰依していたが、ある夜、

「師（元三大師）が夢の中でお告げになるには、信州戸隠山にある観音籤を私の影像の前に置き、信心をこらして占えば、願いに応じて吉凶、禍福を知ることができるであろう。そうして衆生を利益せよ、ということであった。早速戸隠に人を遣わして、ご神前にあった五言四句の占文を竹の札に書き写して筒に納め、経を唱え、ゆすりながら筒の口から出た籤で占ってみると、将来の事が的確に、手に取るように明らかであった」とのこと。

この夢のお告げもあって江戸っ子の間におみくじが広まっていく。御籤本と呼ばれる解説本が各種刊行され、小説家や幕府上層部いわゆる知識層までがおみくじのお世話に。字に達者な者が同じ長屋の住人に読み聞かせる、そんな光景が目に浮かぶようである。



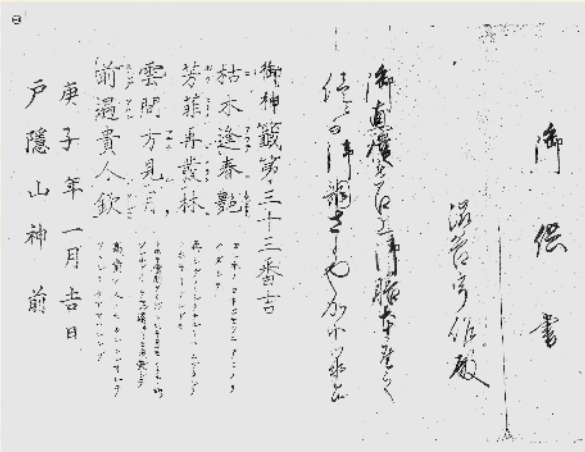
図③御供并御籤文（戸隠山神前）坂本家文書（群馬県立文書館収蔵）

信心を堅固にすること、悪人ならば願いが叶わないことなども告げられるおみくじは、東叡山寛永寺を創始し、幕府の宗教政策を担った天海にとって、百万都市・江戸を治める有効なツールにもなった、とは穿った見方であろうか。

さて、天海の見た夢にある〈戸隠山〉とは、戸隠神社の明治維新前の姿、戸隠山顕光寺という天台宗のお寺のこと。このお告げにより、江戸期初頭、戸隠に既におみくじがあったことが解る。（図③）

当時、奥院（現在の奥社）で奉仕する燈明番の日記に、大晦日、奥院の本堂にておみくじを引き、正月四日に、別当（戸隠山における行政の長官）、山内外の有力者、信者に届けた記録が残っている。

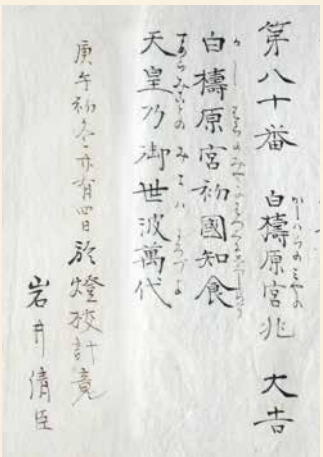
今もお正月に、熱心な信仰により戸隠山を支えてきた戸隠講々員の元には、三十七の神職家を通じて、御神札やその年の天候や作物の豊凶を示した「種兆」と共におみくじが届けられている。



図④御供書・御神籤　渋谷宇作殿　富山県射水市渋谷家文書

明治政府の神仏判然令により戸隠神社となった後、おみくじはいかなる歴史をたどったか。仏教色の強いくじであったから、時代に即したものに改める必要性が生じた。最も簡便な方法は、各番号の**〈観音籤〉**の〈観音〉の部分を〈御神〉＝**〈御神籤〉**とするものである。これは維新直後からなされたらしい。（図④）

観音籤の仏教的な用語を言い換えた版も作られた。例を挙げると、第一番「浮圖（の）塔」を「神仙室」に、第三十五番「胡僧」を「賢人」に改めている。浮圖とは仏陀のこと。（図⑤）明治三十二年に製作された版木が残されている。



図⑥『明治三庚午十月吉日 御神籤 宮澤瑞穂扣』（中社 宮澤家蔵）

図⑤明治32年版御神籤原本 戸隠神社御籤文第壹番大吉（中社 宮澤家蔵）

もう一つの流れは、現在のおみくじへとつながる抜本的改変である。既に明治三年、冒頭に記した「神々の物語にちなんだ和歌」が完成していた。（図⑥）

過渡期に混沌は付き物、明治四十二年から大正五年の間には、少なくとも三種のおみくじが、三十七の神職家の中で併用されていた可能性がある。昭和初期には解消されたようだが、明治維新に伴う宗教改革の余波が六十年以上も打ち寄せていたことになる。

これら改定の歴史は大いにドラマを孕んでいるが、詳細の報告は紙幅の都合もあり、残念ながら次の機会としよう。

天海の夢が示した観音籤が、おみくじ発祥の地とされる比叡山延暦寺、横川の元三大師堂（四季講堂）ではなく戸隠山のものであったことは興味深い。元三大師堂では、今も往時のまま「経を唱え、ゆすりながら筒の口から出た籤で」占われている。〈経〉と〈祝詞〉の違いこそあれ、**神職が祝詞をあげて、おみくじの筒を振る**という方法で、戸隠神社に受け継がれているのである。

〈参考文献〉
『仏教民俗学体系　第八巻　―俗信と仏教―』名著出版／『元三大師御籤本の研究』思文閣出版／『一番大吉！おみくじのフォークロア』大修館書店／『日本書紀全訳』ほおずき書籍／『古事記 倉野憲司校注』岩波書店／『信長公記』角川書店／『慈恵慈眼両大師伝記』国会図書館蔵／『元三大師百籤和解』国会図書館蔵／『戸隠信仰の歴史』 戸隠神社